

埼玉県武蔵野地域

平成28年度
認定

武蔵野の落ち葉堆肥農法

当地域は、江戸の急速な人口増加に伴う食糧不足を背景に、川越藩が1654年から行った開拓に端を発しています。

水が乏しい台地のうえに、火山灰土のため栄養分が少なく表土が風に飛ばされやすいという、農業を行うには非常に厳しい自然条件を克服するため、見渡す限りの草原に木々を植えて平地に林を作り出し、落ち葉の堆肥利用、土壌飛散防止など複数の機能を持たせた、優れた農村計画による開発が行われました。

この歴史的価値を有する平地林などの土地利用は現在まで受け継がれ、今も落ち葉堆肥を活用した持続的な農業が続けられています。

また、管理された平地林はオオタカの繁殖地となっているほか、シュンランやキンランなどの希少植物にも良好な生育環境を提供しています。



1



2



3

1 落ち葉掃きの様子 2 平地林に咲くキンラン（絶滅危惧Ⅱ類）
3 落ち葉堆肥農法でつくった富の川越いも



1



2



3

1 日本の原風景とも言える棚田棚池のランドスケープ
2 成長と仕上がりに期待を寄せる秋の鯉上げ 3 棚田米の田植え

新潟県中越地域

平成28年度
認定

雪の恵みを活かした 稲作・養鯉システム

山間部の豪雪地帯に位置する当地では、棚田で稲作を行うとともに、冬期のタンパク源として農家がため池で食用の真鯉を飼う暮らしが行われてきました。山間地で水が少ないことから、血縁組織「マキ」を中心とした地域コミュニティにより、横井戸の掘削や雪解け水の貯水による稲作や養鯉に用いる水を確保するシステムが受け継がれてきました。

この真鯉から突然変異で生じた色鯉を育種したことにより、江戸時代後期の文化・文政期頃に当地域で錦鯉が発祥しました。質の高い錦鯉は地域の重要な収入源であり、当地の原種が世界各地で利用されるなど重要な知識システムとして継承されています。養鯉業は地域に若い労働力を引きつけ、畦や棚田の保全、棚田と棚池が入り組む特有のランドスケープの維持、祭や料理などの地域文化の継承にも貢献しています。

富山県氷見地域

令和2年度
認定

氷見の持続可能な定置網漁業

富山県氷見地域は、沖合に発達した大陸棚や冬の季節風を遮る能登半島などが好漁場をもたらし、古くから定置網漁業が盛んに営まれ、春は鰯、夏は鮪、秋から冬は鰺が多く水揚げされてきました。特に、鰺は昔から時の権力者などへの献上品にも使われ、今も「ひみ寒ぶり」として全国に知られています。

定置網漁業は、地域に雇用や水産加工などの産業をもたらし、人々も農業や良好な漁場を育む魚つき保安林の保全、嫁ぶりの風習、食文化、信仰など、海を想い、深く関わりながら暮らしてきました。

また、先人が改良を重ねてきた定置網漁業の技術は、水産資源や環境にやさしい持続可能な漁法として、国内だけでなく近年は海外へも普及し、新たな6次産業化などの取組とともに、次の世代に継承していきます。



1



2



3

1 氷見沖に浮かぶ越中式定置網 2 定置網漁の網上げの様子
3 大自然からの授かりもの「ひみ寒ぶり」



1



2



3

1 若狭町・美浜町 三方五湖の風景 2 三方湖のフナ・コイ漁「たたき網漁」
3 久々子湖の「シジミ漁」

福井県三方五湖地域

平成30年度
認定

三方五湖の汽水湖沼群漁業システム

三方五湖は、三方湖、水月湖、菅湖、久々子湖、日向湖からなる5つの湖です。湖を囲む山々から流れ出す淡水と日本海から流れ込む海水とが混ざり合い、淡水魚から海水魚まで多様な魚種が生息しています。

当地域では、それぞれの湖の特性や生息する魚に応じた伝統漁法が営まれています。冬に竹竿で水面を叩いて、湖底でじっとしているフナ・コイを驚かし刺し網で獲る「たたき網漁」や、熊手に似た手搔きの漁具で幼い貝をふるい落とし大きい貝のみを獲る「シジミ漁」などは、いずれも大量に漁獲しない持続的な伝統漁法です。

江戸時代から400年以上もの長きに渡り、当地域の漁業者は協同して、漁期、漁獲量などのルール化や漁法の技術開発に取り組み、村同士の申し合わせや相互の監視により、魚という共有資源の保全管理を徹底し、生物多様性を守っています。